

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 25 日現在

機関番号：80101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03312

研究課題名(和文)北海道地方で特徴的かつ広域的に広がった季節行事の生成と波及に関する研究

研究課題名(英文) A Study on the Generation and Spread of Seasonal Events Characteristic of the Hokkaido Region and Spreading over a Wide Area

研究代表者

池田 貴夫 (IKEDA, Takao)

北海道博物館・研究部・学芸部長

研究者番号：30300841

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、かつて北海道で繰り広げられた民俗再編のうねりを明らかにすべく、(1)冬の百人一首(取り札が木製の「板かるた」の風習)、(2)節分の落花生撒き、(3)七夕のロウソクもらい、(4)秋の観楓会(かんぷうかい)という、北海道で特徴的かつ広域的に広がった4つの季節行事に焦点を当てた。これら4つの季節行事については、そもそも伝播、生成、波及の時期や背景についての事実関係の精査が遅れていた。したがって、これらの行事がいつ頃北海道に伝播し(で生成され)、波及していったのか、その背景としてどのような推進力が働いていたのか、明らかにできるものを明らかにするとともに、現時点で言えることを整理した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

多くの移住者を受け入れ、かつ本州以南と多様なつながりを持つ北海道の民俗に視点を置くことで、本州以南で失われた民俗の様相も明らかになるなど、北海道から日本の民俗史に対して発信できる情報が少なからずある。その発信は、日本民俗学における北海道の存在意義を高めていくことにつながる。また、本研究により、かつて北海道で繰り広げられた民俗再編のうねりのなかに、北海道独自の文化的創造力の軌跡を見ることができ、それらを広く公表・普及し、北海道の魅力とアイデンティティを再発見・発信する機会を提供していくことは、北海道の活力向上に向けた一助となるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this research, in order to clarify the wave of folklore reorganization that once unfolded in Hokkaido, I focused on four seasonal events that are characteristic of Hokkaido region and spread over a wide area, such as (1) Hyakunin Isshu (Karuta with wooden cards) in winter, (2) Peanuts throwing on Setsubun, (3) Receiving candles for Tanabata, (4) Kanpuukai (maple viewing parties) in autumn. In particular, with regard to these four seasonal events, there was a delay in examining the facts regarding the timing and background of their propagation, generation, and spread. Therefore, in this research, I clarify what can be done to clarify when these events were propagated from Honshu, generated in Hokkaido and spread over a wide area of Hokkaido, and what kind of driving force was working in the background. At the same time, I organize what I can say at this point.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：百人一首 板かるた 節分 落花生 七夕 ロウソクもらい 観楓会

1. 研究開始当初の背景

北海道は、とりわけ近代以降多くの移住者が本州以南から到来し、日本各地のさまざまな民俗が持ち込まれてきた地域であり、移動する日本人の精神性を解明する上で極めて重要な民俗学的研究フィールドと位置づけられる。そのなかで、移住者の送出地である本州以南の民俗が北海道の移住先でどう継承され、変容し、消失してきたかを個々にたどる多数の研究成果が、北海道の民俗学において蓄積されてきた。

一方で、北海道には、本州以南の一部にしかなく、かつその後衰退していく民俗を拾い上げ、北海道ならではの新しい様式と地域差を生み出しつつ、北海道のほぼ全域に波及させたものと思われる事例や、新しい民俗形態を日本列島のなかでもいち早く波及させたものと思われる事例など、かつて北海道で繰り広げられた民俗再編のうねりの痕跡が、現在に続くいくつかの季節行事のなかに見いだせる。しかしながら、これまでの民俗学では、これらの生成・波及現象について、北海道は開拓のため日本各地から人が集まってきた土地であるため新しいものを受け入れやすいなどの推測的な言説にとどまり、実証的な理由を説明できていなかった。

2. 研究の目的

本研究は、かつて北海道で繰り広げられた民俗再編のうねりを明らかにすべく、(1)冬の百人一首(とりわけ、取り札が木製の「板かるた」の風習)、(2)節分の落花生撒き、(3)七夕のロウソクもらい、(4)秋の観楓会(かんぷうかい)という、北海道で特徴的かつ広域的に広がった4つの季節行事に注目し、それぞれを生成に導いた推進力、広域的かつ迅速に波及させた推進力、北海道民が広く受容するに至った背景など、多様な推進力のベクトルを明らかにすべく実施したものである。とりわけ、これら4つの季節行事については、そもそも伝播、生成、波及の時期や背景についての事実関係の精査が遅れていたため、さまざまな言説がマスコミなどをとおして流布してきたという現状がある。

したがって、本研究では、これらの行事がいつ頃北海道に伝播し、あるいは北海道で生成され、広域的に波及していったのか、その背景としてどのような推進力が働いていたのか、明らかにできるものを明らかにするとともに、現時点で言えることを整理する作業を主眼とした。

なお、個々の行事の概要は、以下のとおりである。

(1)冬の百人一首(とりわけ、取り札が木製の「板かるた」の風習)

北海道の百人一首は「板かるた」あるいは「下の句かるた」とも呼ばれ、取り札はホウノキの板で製作されたものを使い、上の句は詠まず下の句のみを詠むという特徴が見られる。かつては日本領期の樺太でも行われていた。

(2)節分の落花生撒き

現在、北海道、東北地方、新潟地方、九州南部などにおいて、節分に落花生を撒く風習が、色濃く分布している。

(3)七夕のロウソクもらい

北海道では七夕の日に、子供たちが唄や囃子を伴いながらロウソクをもらって歩く子供行列が見られ、「ロウソクもらい」などと呼ばれている。かつては日本領期の樺太でも行われていた。

(4)秋の観楓会

地域や職場などで行われる秋の慰安旅行は、北海道では「観楓会」と呼ばれている。かつては日本領期の樺太でも行なわれていた。

3. 研究の方法

上記の4つの行事について、本州以南での歴史的・分布的状况、北海道との関係性、北海道に広がる過程についての現地調査および文献調査を進めた。とりわけ、これまでさまざまに考えられてきたこと、指摘されてきた言説が正しいかどうか、またこれまで本州において類似風習の存在が確認されていたが調査できていなかったものについて北海道との関係性は確認できるかどうか、日本列島をこまめに歩く形で一つ一つ確認し、情報収集していくことを重視した。

なお、個々の行事に対する研究方法の詳細は、以下のとおりである。

(1)冬の百人一首(とりわけ、取り札が木製の「板かるた」の風習)

「板かるた」あるいは「下の句かるた」の風習が北海道や日本領期の樺太で広く普及した過程と「板かるた」の生産や流通についてのデータを収集するため、幕末期から昭和初期にかけての文献、新聞、日記類、実物資料等の調査および収集を行った。

百人一首に造詣の深い研究者から、「板かるた」には会津方言の表記が認められるものがあるとの教示を得たことを端緒として、博物館などに残されている概ね明治後期から昭和期

に製作された「板かるた」の翻刻作業を継続的に進めた。
博物館などに残されている概ね明治後期から昭和期に製作された「板かるた」の形態分析を継続的に進めた。

(2) 節分の落花生撒き

北海道をはじめ節分に落花生を撒くようになった文化変化の現象を全国的な視野から把握するため、本州以南において、節分の時期に合わせた現地調査を行った。調査した地域は、以下のとおりである。

- ・宮城県、福島県、栃木県、茨城県
- ・鹿児島県奄美大島、沖縄県沖縄本島
- ・東京都、埼玉県、群馬県、新潟県、長野県、愛知県

北海道における大豆から落花生への変化の過程を、北海道と同様に落花生が撒かれている本州以南の地域と比較検討するため、青森県、新潟県、鹿児島県、熊本県の地方新聞の調査を行った。調査した新聞は、以下のとおりである。

- ・昭和33年から昭和40年にかけての『東奥日報』
- ・昭和11年から昭和32年にかけての『新潟新聞』『新潟日日新聞』『新潟日報』
- ・昭和8年から昭和43年にかけての『鹿児島朝日新聞』『鹿児島新聞』『鹿児島日報』『南日本新聞』『夕刊鹿児島』
- ・昭和10年から昭和52年にかけての『九州新聞』『九州日日新聞』『熊本日日新聞』

(3) 七夕のロウソクもらい

北海道や日本領期の樺太に広がった「ロウソクもらい」に類似する風習が広がったとされる青森県、秋田県において、類似風習についての文献調査、聞き書き調査を行った。北海道における七夕の子供行列で一般的に囃される歌と同様の歌が囃されていたことが確認されている新潟県胎内市村松浜における現地調査、郷土誌調査を行った。

(4) 秋の観楓会

「観楓会」の呼称は津軽地方から北海道に持ち込まれたのではないかとの言説を聞いたことがあったため、青森県弘前市の弘前城において「菊と紅葉まつり」に関する現地調査、弘前市立博物館ならびに弘前市立図書館において津軽地方の「観楓」行事に関する史料調査、黒石市の中野神社において「観楓」行事に関する現地調査および聞き書き調査（特に中野神社に設けられている「観楓台」についての調査）を行った。

北海道と同様に「観楓会」という名称で紅葉を観賞する行事が開催されてきた妙心寺退蔵院において、「観楓会」の語源などに関する聞き取り調査、鑑賞するカエデの種類、庭園の構造などについての実地調査・記録を行った。

4. 研究成果

本研究で注目した4つの季節行事は、北海道の独特な自然環境、本州とは異なる歴史、そして多様な人びとの行き交いのなかで伝わり、生み出され、育まれてきたことは間違いなく、とりわけ本州以南では一部にしかなかった言わば独特とも言える風習が近代の北海道では広域的に広がったという事実、その拡がり方のスピード、分布の密度、さらには本研究で確認できた伝播・生成・波及の時期やその背景に関する諸々の証拠を統合して考えると、そのこれらの季節行事の波及現象は創作者（あるいは本州からの伝達者）と受容側（北海道民）の相互関係だけではなく、創作者（伝達者）と受容側をつなぎ波及を促したエージェント的な存在（官、民、その他）による推進力が強かったであろうという構図のなかで捉え直していくことにより、さらなる研究の進展が見込まれるとの結論に至っている。なお、本研究において、個々の行事について明らかにできたことは、以下のとおりである。

(1) 冬の百人一首（とりわけ、取り札が木製の「板かるた」の風習）

北海道における「板かるた」風習は、会津地方ないしは東北地方、さらには金沢地方などからの移住者が移住地に持ち込み、広がったものなどと考えられてきた。

本研究をとおしては、明確な時期を特定することはかなわなかった（明治中期頃までの時期であることは間違いない）が、現状確認できる証拠からは、会津地方からの移住者が北海道に実物ないしは知識を持ち込んだことが端緒と考えることが妥当であろうという結論に至っている。また、明治中期頃から、新しい様式を生成しつつ、昭和初期頃までには北海道全域さらには日本領期の樺太にまで広がった事実を確認するとともに、波及を推進したエージェント的な存在があった可能性が強いと考えることが妥当との見解に至っている。なお、個々の調査により明らかにできたことは、以下のとおりである。

概ね明治後期から昭和初期に製作された複数の「板かるた」に書かれた和歌を翻刻し、そのなかに東北地方の各方言らしきものがあることを確認した。北海道に「板かるた」が広がるにあたり、東北方言がさまざまに反映されてきたことを示唆するデータが整いつつある。今後それらに書かれた東北方言がどの地域の方言であるのかを特定していくことにより、「板かるた」の風習が広がっていった過程の一端を明らかにできる可能性がある。

実物資料の形態にどのようなバリエーションとその変化があったかを示唆するデータが整いつつある。以下は、その傾向についての所見である。

- ・板の形態：古いものは大きさや縦と横の比率もまちまちであるが、後にほぼ定形化していった。また、古いものは四隅が角張っている、ないしは四隅を斜めに直線的に裁断しているものが多いが、後に四隅を丸く整える形態へと定形化していった。
- ・板の材質：古いものはホウノキ以外のものも見られるが、後に概ねホウノキに統一されていった。
- ・手書きと印刷：古いものは墨と筆による手書きのものが多いが、後に印刷が主流となっていった。
- ・文字の崩し方・散らし方：古い手書きのものは、文字の崩し方や散らし方はさまざまであるが、印刷版が出回ると定形化していった。
- ・変化の時期：上記の各項目について、概ね明治中・後期頃から定形化・一様化が始まり、昭和初期頃には定形化・一様化されたものが主流になったと推察される。
- ・福島県会津地方との関連性：その形態比較から、北海道の「板かるた」と会津地方に残っていた「板かるた」の形態は、その他の地域で確認された「板かるた」に比して、極めて近い関係にある。

(2)節分の落花生撒き

北海道のみならず、東北地方、新潟地方、九州南部などにおいて、節分に落花生を撒く風習が、色濃く分布していることは明らかとなっていたが、その変化をめぐる日本全国での動向が詳細には把握されてこなかったこと、また新聞等の文献調査の欠如から、大豆から落花生への変化をめぐる時期や背景について、依然として不明な点が多かった。

本研究をとおしては、日本列島におけるその始まりは、北海道や新潟県、長野県北部において比較的早く、昭和 20 年代後半から昭和 30 年代頃にかけて広がっていったものと考えることが妥当との見解に至っている。その変化を促した端緒までは明確な確認はできないが、概ね落花生を使用することの清潔性、味覚、片付けやすさなどの点から人びとに受け入れられていったものと考えられ、かつそこには落花生を撒くことを促すエージェント的な存在があった事例を複数確認した。

一方で、鹿児島地方では、昭和初期にはすでに大豆が売れすぎてしまって、代替えとして落花生が大量に売れた年があったこと、また日本全国において大豆の値段が高騰し節分行事の主催者が困った年があった事例も確認できるなど、より多角的な観点から結論を導き出す必要があるものとする。また、節分の落花生撒きをめぐる、雪の存在が大豆から落花生への変化を促した要因ではないかとの言説があるが、九州南部でも落花生が色濃く撒かれること、また、北海道をフィールドとした調査のなかでも、そのような事実関係は直接的に確認できていないことから、現時点では明らかな要因と断言することはできないものとの見解に至っている。なお、個々の調査により明らかにできたことは、以下のとおりである。

本州以南における節分の時期に合わせた現地調査から

- ・落花生と大豆の境界領域と推定された宮城県、福島県～栃木県、茨城県においては、宮城県や福島県では概ね落花生が優勢であること、栃木県や茨城県では概ね大豆が優勢であること、一方で近年においては栃木県や茨城県でも落花生が相当量撒かれるようになっていくことを明らかにした。
- ・奄美大島においては、現在においては落花生が相当量撒かれるようになっていくこと、大豆から落花生への変化は概ね昭和の終わり頃から平成期にかけて浸透していったことを示唆するデータが蓄積された。一方、沖縄本島においては、子供の少ない集落などにおいては現在においても豆撒き自体が不振であること、また現在豆撒きを行う都市部や学校などにおいても、ムーチャーなどとの関係もあり豆撒き自体が浸透していったのは概ね昭和の終わり頃から平成期にかけてであったこと、さらには現在においても節分豆としての落花生の浸透は不振であり、むしろ「焼き大豆」などが好んで使用されていることを示唆するデータが蓄積された。
- ・東京都、埼玉県、群馬県および愛知県では伝統的に概ね大豆が優勢であること、新潟県、長野県北部では昭和 20 年代後半から昭和 30 年代頃にかけて徐々に落花生が撒かれ始め現在は落花生が概ね優勢であるが、新潟県佐渡市や長野県中部・南部ではそれにやや遅れて概ね昭和 50 年代前後から落花生が撒かれるようになり、現在では落花生が相当量撒かれていることを明らかにした。

地方新聞の調査から

- ・とりわけ、昭和43年の『南日本新聞』には、鹿児島市ではさやつきの落花生が飛ぶように売れたこと、とりわけ「疫病神退散を願ったあと、ポリポリ食べるのに衛生的でおいしいということかららしい」「デパートの話ではダイズの二 - 三倍の量が売れたそうで、今やママまきの主役は落花生に移った」とあるなど、変化の理由や販売比率にまで踏み込んだ稀な記事を発見できた。さらに、昭和15年の『鹿児島朝日新聞』には、「本年は大豆の品切れとあつて。南京豆を代用する事になり市内の落花生屋は数日来、大変な賑ひを見せて居る。」とあるなど、昭和10年代において、節分で大豆が品切れとなった際、鹿児島の人はその代用として即座に落花生を選択したという事例も確認できた。

- ・なお、例えば、これまで行ってきた青森県内の聞き書き調査では、青森県での大豆から落花生への変化は概ね昭和40年代頃からと把握していたが、『東奥日報』によると、昭和40年代にはすでに青森県でも落花生撒きが一般化しており、それ以前においても落花生を撒いていたであろう事例が確認された。民俗の変容過程をめぐっては、聞き書き情報は、文献等に記された情報よりも遅くなる可能性があるなど、本研究をとおして、学問手法上の問題点も浮かび上がっていることを付記しておく。

(3)七夕の口ウソクもらい

江戸時代後期の文献に箱館(現在の函館)で青森のねぶたに近い行事が行われていた記録があることなどから、北海道の口ウソクもらいの起源は青森のねぶたではないかなどといった仮説があるが、口ウソクをもらって歩く子ども行列については直接的に記されていないため、決定的な証拠は確認できていない。

しかしながら、本研究をとおしては、七夕に北海道と同じような唄を囃しながら口ウソクをもらって歩く子ども行列は、古くから本州でも青森とりわけ下北半島などで七夕やねぶたと関わりながら行われてきた(その多くは、昭和30~40年代頃にかけて途絶えていったとされる)ことから、時期は明確にはできない(明治中期頃までの時期であることは間違いない)が、同様の風習が函館周辺に伝わったものと考えることが妥当との見解に至っている。そして、明治期以降、新しい様式と地域差を生み出しつつ、北海道の概ね全域(ただし、十勝地方、根釧地方は分布が希薄となっている)さらには日本領期の樺太で受け入れられていった。また、その背景としては、波及を推進したエージェント的な存在があったことが十分に考えられる。なお、個々の調査により明らかにできたことは、以下のとおりである。

青森県、秋田県における文献調査、聞き書き調査から

- ・現状、管見の限り、明らかに口ウソクをもらって歩く子ども行列のことが明確に記されている最も古い文献は、明治24年の『風俗画報』第30号に記されている札幌の七夕に関する記述である。
- ・北海道の口ウソクもらいと青森県で行われていた類似風習の形態は、極めて近い関係にある。
- ・秋田県では、北海道の口ウソクもらいと関連する行事についての情報、痕跡は得られなかった。

新潟県胎内市村松浜の調査から

- ・村松浜集落からは、かつて多くの人びとが小樽市高島に移住し、その後も交友関係を保つなど、村松浜と小樽との結びつきは歴史的に強かったことなどから、現時点においては、村松浜の類似風習は小樽から村松浜の七夕まつりに取り入れられたものと考えることが妥当という見解に至っている。

(4)秋の観楓会

これまで「観楓会」の始まりやその背景については、さまざまな言説がマスコミなどで報道されてきたが、ほぼ実証的な研究はなされてこなかった。また、津軽地方から北海道に持ち込まれたのではないかとの言説も聞いたことがあるが、定かではなかった。

本研究においては、「観楓会」という用語は、北海道の札幌、小樽近郊においては明治30年代頃にはすでに使用されていた用語であり、また、概ね野外で紅葉を楽しみ、酒を飲み、芸を披露するといった慰労目的の会として会社などで始まったであろうこと、そして「観楓会」は北海道の全域さらには日本領期の樺太にまで広がっていったこと、その背景として波及を推進したエージェント的な存在があったことが十分に考えられることまでを確認した。また、本州以南の行事との関係や北海道全域への波及の背景については、未だ有用な情報を得られていないことから、現時点では、北海道内で生成され、波及していった風習である可能性が強いと考えることが妥当との見解に至っている。なお、個々の調査により明らかにできたことは、以下のとおりである。

弘前市、黒石市での調査においては、「観楓会」をめぐる北海道と津軽地方の直接的な関係性は、現時点では確認できないとした。

京都市の妙心寺退蔵院の調査においても、北海道の「観楓会」と退蔵院の「観楓会」との直接的なつながりは、現時点では確認できないとした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 池田貴夫	4. 巻 2019年年9月14日
2. 論文標題 地名と私たち	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 朝日新聞pp.26（道内）	6. 最初と最後の頁 26-26（道内）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 池田貴夫	4. 巻 2020年2月2日
2. 論文標題 節分の豆まき用に落花生が目立って販売されている地域	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道新聞	6. 最初と最後の頁 17-17（くらし）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 池田貴夫	4. 巻 第70回
2. 論文標題 節分で落花生を撒くことについて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本民俗学会第70回年会研究発表要旨	6. 最初と最後の頁 88-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 池田貴夫	4. 巻 第103巻第8号
2. 論文標題 北海道150年 - 急速に姿を変えた北の大地 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 土木学会誌	6. 最初と最後の頁 30-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田貴夫	4. 巻 第11号
2. 論文標題 <北海道らしさ>の秘密をより鮮明に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 森のちやれんがニュース	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件（うち招待講演 20件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 積雪寒冷地の生活と諸問題
3. 学会等名 授業科目関連特別講演、主催：北海道医療大学リハビリテーション科学部（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 北海道の基礎知識 - 自然・歴史・文化 -
3. 学会等名 北海道への修学旅行に先立つ事前学習講演会、主催：公益社団法人北海道観光振興機構、神奈川県立藤沢総合高等学校（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 北海道の基礎知識 - 自然・歴史・文化 -
3. 学会等名 北海道への修学旅行に先立つ事前学習講演会、主催：公益社団法人北海道観光振興機構、蒼開高等学校（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 積雪寒冷地の生活と諸問題
3. 学会等名 授業科目関連特別講演、主催：北海道医療大学リハビリテーション科学部（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 なにこれ!? 北海道学
3. 学会等名 北海道教育旅行説明会（盛岡会場）、主催：北海道、公益社団法人北海道観光振興機構（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 なにこれ!? 北海道学
3. 学会等名 北海道教育旅行説明会（仙台会場）、主催：北海道、公益社団法人北海道観光振興機構（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 なにこれ!? 北海道学
3. 学会等名 北海道教育旅行説明会（山形会場）、主催：北海道、公益社団法人北海道観光振興機構（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 なにこれ!? 北海道学
3. 学会等名 北海道教育旅行説明会（大宮会場）、主催：北海道、公益社団法人北海道観光振興機構（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 なにこれ!? 北海道学
3. 学会等名 北海道教育旅行説明会（福岡会場）、主催：公益社団法人北海道観光振興機構（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 北海道の自然・歴史・文化 - 特に冬期間の人びとの暮らしについて -
3. 学会等名 北海道への修学旅行に先立つ事前学習講演会、主催：公益社団法人北海道観光振興機構、東京都立忍岡高等学校（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 なにこれ!? 北海道学
3. 学会等名 北海道教育旅行説明会（大阪会場）、主催：公益社団法人北海道観光振興機構（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 ATガイディングに必要な『文化的交流』とは - なにこれ!? 北海道学 -
3. 学会等名 北海道アドベンチャートラベルミーティング（帯広会場）、主催：公益社団法人北海道観光振興機構（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 ATガイディングに必要な『文化的交流』とは - なにこれ!? 北海道学 -
3. 学会等名 北海道アドベンチャートラベルミーティング（釧路会場）、主催：公益社団法人北海道観光振興機構（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 ATガイディングに必要な『文化的交流』とは - なにこれ!? 北海道学 -
3. 学会等名 北海道アドベンチャートラベルミーティング（札幌会場）、主催：公益社団法人北海道観光振興機構（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 ATガイディングに必要な『文化的交流』とは - なにこれ!? 北海道学 -
3. 学会等名 北海道アドベンチャートラベルミーティング（旭川会場）、主催：公益社団法人北海道観光振興機構（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 七夕にはロウソクもらう? - 季節行事に見る北海道らしさ -
3. 学会等名 道新文化センター3回連続講座『今こそ北海道学! - 北海道らしさの秘密を探る - 』、主催: 道新文化センター(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 北海道で再編・創造された本州由来の文化 - 地名や季節行事からみる文化の伝承 -
3. 学会等名 さっぽろ市民カレッジ2018秋期講座『日本各地の文化が息づく北の大地 - 道産子の感性を再発見しよう - 』、主催: 札幌市生涯学習センター(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 節分で落花生を撒くことについて
3. 学会等名 日本民俗学会第70回年会、主催: 日本民俗学会第70回年会実行委員会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 北海道の長い歴史 - そのなかの『北海道150年』 -
3. 学会等名 第9回日本ジオパーク全国大会アポイ岳(北海道様似町)大会北海道150年記念講演会、主催: 第9回日本ジオパーク全国大会アポイ岳(北海道様似町)大会実行委員会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 積雪寒冷地の生活と諸問題
3. 学会等名 招待講演、主催：北海道医療大学リハビリテーション科学部（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 池田貴夫
2. 発表標題 日本領期の樺太における温泉開発と樺太島民
3. 学会等名 サハリン・樺太史研究会第42回例会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小川正人・東俊佑・佐々木利和・遠藤志保・大谷洋一・池田貴夫・田中祐未・鈴木明世・鈴木あすみ・山田伸一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北海道博物館	5. 総ページ数 144
3. 書名 北海道博物館第5回特別展「アイヌ語地名と北海道」図録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関